

13 阿波鏡台の発展と先覚者たち

徳島というと、明るく情熱的な阿波踊りを地域イメージとして思い浮かべるが、阿波浄瑠璃や木偶（でく）など古典芸能が地域の文化的土壌として息づく優雅な側面を併せ持つ土地柄である。そこに女性の魂ともいえる鏡を置く鏡台づくりが発展したことは、なにか不思議なつながりがあるように思える。

しかし、阿波鏡台は、決して優雅な産みの歴史を持つ産物ではなく、庶民が生活の苦闘と努力の結晶で生み出したものである。

藩主蜂須賀家と木工製品のおこり

徳島の木工業の歴史はあまり古くなく、阿波藩蜂須賀家の時代からである。

阿波藩初代藩主である蜂須賀家政は、「太閤記」の矢作の橋でなじみ深い小六正勝の子で、天正十三（1585）年、豊臣秀吉の四国征伐での功により、播州から阿波十七万五千七百石の領主になった。

家政は、聡明かつ豪胆で、立派な藩主であったが、その政治の中で特筆すべきは、戦乱のため荒れ果てた土地を耕しての藍づくりをはじめ、海水を利用した塩づくりや、山間の僻地を切り開いてのたばこ栽培など、産業を奨励したことである。江戸時代、阿波藩の財政を豊かにした山のたばこ、海の塩、そして陸の藍の開拓は、彼によってはじめられ、以降、二代至鎮（よししげ）、三代忠英（ただてる）の三代の間にその基礎は確立した。

その後、家政は、関ヶ原の戦いで東軍に属して領地を保障され、至鎮のとき、大坂の陣の功によって、元和元（1615）年、淡路七万石を加封となり、以後、明治に至るまで十四代にわたって阿波、淡路両国を治めるに至った。



蜂須賀家政の銅像（徳島城公園：徳島市）

さて、徳島の木工産業は、こうした藩政時代に起こった。城下の安宅町（現在の徳島市安宅〔あたけ〕）に蜂須賀藩の水軍役所があり、水軍関係の役人や、船をつくったり修理をする船大工が毎日通っていた。

しかし、船大工は収入が少なかったため、役所から木の切れ端をもらってきて、ちりとりや炭取り箱、もろぶたなどをつくっていた。

どこの藩でも収入の少ない身分の低いものが、内職に雨傘を張るとか、楊子けずり、扇子はりをしたことは、講談や浪花節によくでてくる話だが、蜂須賀藩の船大工たちもご多聞にもれず、手作りの木製品をつくっては売り、暮らしの足しにしていたのである。

こうして、船大工は、昼は水軍役所で船の修理や建造に従事し、夜は内職に精を出してつくったものを売っていた。これが今日、有力な地場産業にまで発展した徳島県の木製品のはじまりで、その後、明治時代になると、建築、鏡台、タンス、建具というように専門化・分業化され、発展していった。

こうしたことを見ると、阿波鏡台は、芸能のお国ぶりの優雅な所産ではなく、むしろ、地場産業の起源にみられる生活との戦い、苦境を克

服した努力の積み重ねから生まれたのである。

勞せずして価値のあるものを得ることはできない。苦しい生活に挑んだ船大工の尊い努力と、これを導き、フルに発揮させた多くの先覚者の力とがあいまって、立派な実を結ぶことができたのである。

鏡台づくりのはじめ

徳島で鏡台をつくるようになったのは、『渭東風土記』によれば、明治十八年、福島町（現在の徳島市福島）の東条房助（一説では房吉または房次郎）、大工島（現在の徳島市大和町）の佐藤国太郎、安宅町の郡磯太郎の三人が大阪へ売り出したことが始まり、とされている。

佐藤、東条たちがいつも通り手作りの木製品を持って大阪に出かけ、取引先でいろいろ商売の話をしていたところ、手間は掛かるが売れゆきがよく、値段も高い鏡台をつくったらどうかと取引先から勧められた。三人は帰ってこのことを仲間と相談したところ、みんなが賛成し、安宅町を中心に鏡台づくりが広まっていくこととなった。

出来上がった鏡台の評判もよく、大阪でも指折りの問屋筋が気持ちよく引き受けてくれるようになったので、本格的に鏡台づくりを始めるようになった。ちょうど明治二十五年頃のことだった。

こうして徳島の鏡台は、はじめて関西市場へデビューしたが、当時は、鏡台といっても徳島でつくるのは生地の箱だけで（後には箱のニス塗りなどをして出す者もでてきたが）、塗りと鏡の取り付けは大阪で仕立てていた。つまり、加工と仕上げの工程は大阪の業者に任せていたので、売り上げはたいしたことなく、鏡台は全て大阪のものとして売り出されていた。

したがって、徳島の鏡台は、いっさいを大阪の問屋の手に握られていて、販路は確保されていたが、値段は安くされ、無理な注文を受けな

ければならないこともしばしばあった。

そこで、識者の間では、隷属的な状況から脱却し、徳島鏡台の独立を図ろうとする声が上がってきた。

郡磯太郎のあとを継いだ郡忠治氏によると、「私は、このようなことをしてはいつまでも『うだつ』があがらないので、奮起して阿波鏡台として売り出さないとだめだと思い立った。そこで、明治四十三年、二十三歳のとき、鏡もつけ、いっさいの仕上げをした鏡台をつくり、四国や中国、九州方面へ鏡台の注文をとりに出かけていった。

このとき初めて阿波鏡台が問屋を介さず県外へ売り出されたが、結果は上々だったので、みんなにも勧めた。その後、仕上げまで行って売り出す者がどんどん増えたので、大阪の業者に頼らず、大阪へも阿波鏡台として売り出すようになった。」

こうして、郡氏をはじめ先覚者の激励と指導によって、木地屋からタテ・ワク屋が独立し、鏡のふちや柱をつくることを専業とする者も現れ、大正十一年頃になると塗装のやり方までも修得するようになり、阿波鏡台は確立した。

この間にも、大阪との取引は自然と密接になり、徳島から出て、現地で製造を始めたりするものも出てきた。また、都会での技法や先進地の静岡の鏡台に触れる機会も多くなって、採長補短、堅牢第一とする地元の技術は大いに進歩した。

西洋流の鏡台がつくられ始めたのは昭和初めからで、この頃から木工機械を据えつける業者も出てきて、質、量ともに大いに進歩し、阿波鏡台の生産体制は整備されていった。

だが、ここに至るまでの努力と苦心は、決して生易しいものではなかった。徳島で機械製材をはじめ、北海道材を初めて持ち込んだのは松田文五郎であったが、最初のうちは板にゆがみがあったり、機械の故障があって苦勞した。その後、研究の結果、今のような立派なものがで

きるようになった。

一方、鏡のガラスはもっと調達に苦労した。はじめのうちは、日本製品は到底使い物にならず、舶来ものに限られていた。それも、少しでも傷があれば面にムラができて、いびつに写ったり、色が黄色や白く写る物もあった。当時、一番よいとされていたイギリスの鏡でも時々使えない物が出たが、そんな時、大阪のような都会では建築用のウインドウなどに融通がきいたが、徳島ではそうはいかなかったので、わざわざ大阪の間屋へ送って鏡をつけてもらうような時代もあった。

また、販路拡大のために、日本国内はもとより、満州や朝鮮まで出かけてゆき、大連では三年も続けて見本市を開いて宣伝に努めた。

更に困ったことは、昭和の初めに起こった経済恐慌で、モラトリアム（戦争そのほかの非常事態時に、法令をもって一定期間債務の履行を延期させること）にあったときで、資金繰りには相当苦労した。得意先が次々と倒産してしまい、代金を取りにいったとしても、千五百円の売り掛けにわずか三十円か五十円ぐらいしか払ってくれず、出張旅費にもならないぐらいだった。貸し倒れのためどうにも立ちゆかず、生命保険の掛け金を流用したり、高利の借金をしてやりくりしたが、その後、十年間ぐらいは借金返済に苦労した。同業者の多くが打撃を受け、立ち直るのは容易ではなかった。

阿波鏡台の現状と課題

阿波鏡台の特徴は、引き出しなど内部はほとんど桐材を使って白木地とし、この木地を糊付けでなく、切り込みを入れて組み合わせ、製品に狂いの起こらないようにつくっていることである。これは、船大工以来、伝統の職人の業であり、堅牢をもって誇りとしているからである。

生産者も意欲的に努力し、戦後、昭和二十二年には空（もく）張りもできるようになり、二

十五年頃からは機械化も大いに進み、鏡台の木地の表面にパネライトやデコラなどを使って堅牢かつ優雅なものをつくっている。

また、販路においても従来、静岡鏡台は東京をはじめ関東方面、阿波鏡台は京阪、中国、四国、九州の西地域を市場としていたが、その後、東北、北陸、北海道をはじめ東京方面のデパートにも積極的に販路を開拓している。

一方、問屋筋でも鏡台組合をつくり、常に研究会を開いて品質の向上と趣向の研究を怠らず努力している。例えば、関東向けには地味に、関西向けは比較的派手にし、化粧品も注文にあわせて張るように、売り先の人情や風俗、習慣などをよく研究し、細心の注意をはらって顧客の満足を高めることに努めている。また、県が指導して、全国各地で販売店や地方有力者を集めて地域別の懇談会を開くなど、常に顧客の声を聞いている。

このように、かつては生活するための内職として始められた木製品づくりが、先覚者の指導と地域住民の不屈の努力によって、徳島の地場産業として確固たる地位を獲得するまでに至ったのである。



昭和28年当時の阿波鏡台
（写真提供：財徳島市地場産業振興協会）

阿波鏡台は、比較的高級品を好む京阪神などが市場の中心となっているため、高級、中級商品が多く大衆品が少ない。そのため、阿波鏡台は、手工芸品的な複雑な工程が必要であり、大衆品を主力としている静岡鏡台のように一貫作業によって量産化できない。したがって、近代経営による一貫作業という時代の要請は、阿波鏡台にとって大きな課題となっている。

しかし、量産化されない高級品が阿波鏡台の特徴であり、存在意義であり、誇りでもある。良き伝統を捨てて顧みないような革命は、真の改革とは言えない。願わくば、阿波鏡台が新しい時代の要請に答えながら、改善する点は慎重に改善を行って、しかも、伝統の誇りを守りながら発展の道に進むことを望んでやまない。

徳島県の木工業

徳島県の木工業は鏡台だけでない。そのほかの木工業にしてもそれぞれの歴史があり、以下、簡単に紹介する。

タンス

旧幕時代からつくられていて、安宅町の久米家が代々藩主へ納めていた。

明治二十五年、大工島の福本増吉という人が、神戸の商社丸善と商談を結んで、はじめて県外へ持ち出した。その後、当時の県立工業学校校長だった吉田氏の指導と激励により、大工島の浜口五郎、南福島町（現在の徳島市新南福島）の山添一郎両氏が先駆となって、明治三十五年、大阪に進出するようになった。

下駄

慶応元年、住吉島（現在の徳島市住吉）の斎藤島蔵という人が桐下駄をつくって、淡路や香川、中国地方の各地へ売り出したのが始まりとされている。

雑木下駄は、明治に入ってから、福岡芳雄氏

が最初に製造した。材料は、ハンノキやノブなど県内産の材料を使い、大正になって北海道産のヤナギやセンなどを仕入れ、機械化して量産した。

その後、生活様式の変化によって、段々と生産量は減少してきているが、新しい工夫と研究によって、京阪方面では阿波下駄として評判は高い。

建具

建具の製造がはじまったのは慶応元（1865）年といわれ、その創始者は福島本町の米井宇太郎という人で、製品を県内や香川へ送っていた。

明治二十年頃、加田屋治平という木材商を営んでいた人が、帆船で阪神方面へ木材を送っているうちに、阪神方面で建具を売り出せば売れるに違いないという見識から、木材の集積地である県南那賀郡の中島（現在の阿南市中島町）で建具の製造をはじめたことから、現在はここが主産地となっている。

彼は、徳島建具の恩人として、大いに推奨するにたる先覚者である。

以上

（担当：神野）

本編は、渡辺茂雄氏著「四国開発の先覚者とその偉業」（昭和39年～42年、四国電力(株)発行）を原典に編集しています。